

35. 高齢者にみられる眼窩先端症候群

越谷病院眼科

馬場 賢, 鈴木利根, 筑田 眞

【目的】当科にて過去5年間に経験した75～82歳の眼窩先端症候群の女性3例について検討した。

【症例】症例1は複視が主訴の82歳女性。視力は右0.07(矯正不可), 左0.3(0.5)。ゴールドマン視野検査にて右眼は測定不可, 左眼は左同名半盲を認めた。内頸動脈海綿静脈洞瘻による右視神経萎縮, 全外眼筋麻痺の右眼窩先端症候群, さらに静脈性梗塞から左同名半盲の診断に至った。脳神経外科にてコイル塞栓術施行されたが眼症状は不変であった。

症例2は初診時に虚血性の左外転神経麻痺と診断された75歳女性。視力は右0.5(0.8), 左0.5(0.9)。初診時の画像検査では明らかな異常はなかった。発症2ヶ月で同側三叉神経麻痺, さらに同側全外眼筋麻痺に進行した。発症11ヶ月後に副鼻腔原発の腫瘍がみつき, 耳鼻科にて蝶形骨篩骨洞開放術施行されたが光覚なし。病理検査により, 腺様嚢胞癌の眼窩先端部への浸潤と診断され, 放射線治療施行された。

症例3は数日間で急激に左視力低下をきたし, 左外転麻痺を伴った75歳女性。視力は右1.2(矯正不可), 左30cm/指数弁。MRIT2強調画像にて左視神経周辺部に高信号域(tram-tracking sign)を認め, 左球後視神経炎および左外転神経麻痺の眼窩先端症候群をきたした非特異的眼窩炎症と診断した。ステロイド内服漸減にて外転麻痺は消失, 約3ヶ月で視力は0.7へと改善した。

【考察】眼窩先端症候群の原因は, 炎症, 腫瘍, 血管異常, 感染, 副鼻腔疾患, 外傷などがある。今回はそのうち血管異常, 腫瘍, 炎症を経験した。高齢者では, 副鼻腔アスペルギルス症などの真菌感染による眼窩先端症候群が致命的でもあり, 注意すべきという報告が増えている。

【結論】高齢者に特異的な原因はみられなかったが, 症例3のようにステロイド治療を高齢者に行う場合は真菌症など感染症には充分注意すべきである。

36. 当科における先天性難聴児の検討

耳鼻咽喉・頭頸部外科学

中村真美子, 深美 悟, 平林秀樹, 春名眞一

【目的】新生児聴覚スクリーニングは聴覚障害児の早期発見・療育を目的として新生児に施行される聴覚検査である。今回われわれは新生児聴覚スクリーニングでrefer(再検査)となり, 当科を受診した児の精密聴力検査の結果とその後の転帰につき検討した。

【方法】2008年1月1日から2011年12月31日の3年間に新生児聴覚スクリーニング後の精密検査を依頼されて当科を受診した児71例(男児45例, 女児26例)を対象とした。検査はMASTERを用いて聴性定常反応(ASSR)の閾値を測定し聴力を評価した。

【結果】1, 当科を受診したrefer児とASSRの結果: 聴覚スクリーニングで1側referが48例, 両側referが23例であった。ASSRの結果は両側難聴が24例, 片側難聴は29例であった。

2. 紹介元: NICU36児, 小児科12児であった。次に産科開業医9例, 当院産科, 他院小児科, 他院耳鼻科が各2例であった。

3. 初診日齢と検査施行日齢: wellborn児は初診日齢平均48.7日, 検査開始日齢は平均96.3日であった。high risk児は初診日齢平均82.0日, 検査開始日齢は平均138.4日であった。

4. 両側難聴児の内訳: 24例中high risk児は20例(83.3%)でwellborn児は4例(16.7%)であった。ハイリスク因子は最も多いのは染色体異常などの症候群であった。

5. 片側難聴児の内訳: 29例中high risk児は22例(75.9%)で, wellborn児は7例(24.1%)であった。ハイリスク因子は外耳道閉鎖および耳介奇形が最も多く認められた。

【考察】スクリーニング最大の目的は言語発達に支障をきたす恐れのある両側難聴児を発見し, 速やかに療育を開始することである。当院は大学病院という性質上high risk児が多く, 基礎疾患のため検査開始日齢が遅れる傾向にあったが, wellborn児においてはほぼ3か月以内に精査を施行することができた。また平成19年日本耳鼻咽喉科学会で両側性難聴は29%と報告されており, 当院でも33%とほぼ同じ結果であった。